

JIA news kinki

# 翔

syo

no.098/2006

春号





表紙写真：藤岡郊二郎  
(撮影 - 上田恭嗣)

## 表紙解説 - 藤岡郊二郎

倉敷中央病院に近い倉敷市鶴形一丁目に佇む邸宅であった。この所有者とは、講演会の席上で薬師寺の作品紹介をスライド説明したとき、たまたまその場に来ておられ「それは私の自宅です」と名乗られたいきさつがある。しかし、次の世代に代替わりした時、この建物は消えてしまった。

# CONTENTS

## 連載

- 「住宅部会通信2006」 広渡孝一郎 3
- 「建築家の視点」 中西重裕 4
- 「都市点描」 井口勝文 5

## 情報

- 新入会員紹介
- 「編集後記」 木戸口浩之 7

## 地方に生きたアール・デコの建築家 - 薬師寺主計

### その8 倉敷のモダン住宅 - 藤岡郊二郎

ショックな建物再会であった。岡山にある両備記念財団から研究費をいただき、詳細調査の打ち合わせに伺ったまさにその時、この建物は解体工事に入っていた。民間住宅の保存の難しさを目の当たりに感じさせられた物件でもある。

当初の建物所有者・藤岡郊二は、薬師寺主計と第六高等学校（岡山市）の同窓で、東京帝国大学に共に進んだ仲でもあった。藤岡は、大原孫三郎に早くから仕えており、この建物が完成した大正15(1926)年には、倉敷絹織株式会社（現クラレ）設立の常務取締役として抜擢されている。この住宅は、大原孫三郎が薬師寺に設計を命じ建て与えたものであったが、藤岡は最後に大原の袂を離れ、所有者が変わったという経緯もある。

建物の外観は、当時としては極めて早期で、近代的なデザインとして表現されている。大正15年の作品としては、ずば抜けたモダンデザインといえよう。無駄な装飾を排し、合理的で機能的なファサードを呈しており、アール・デコの行き着く先のインターナショナルスタイルに通じている。

道路に面する鉄筋コンクリート造の門塼のデザインは、これまでに述べた中國銀行旧本店の三階会議室天井に設けられた梁と同じ多角形で、アール・デコの表情を見せている。このデザインモチーフは、薬師寺が手を入れた大原美術館（1930年）の石組門のデザインとも類似性がある。門灯、玄関灯には四角錐、六角錐のアール・デコ調の器具が取り付けられていた。建物の詳細について眺めてみると、玄関アルコーブの上部はアーチ状にデザインされ、二階の階段室部分の窓も上部が半円形となっている。屋根材は、中国東北部の天然スレートが敷かれていたが、後に瓦屋根に置き替えられた。外壁はドイツ壁仕上げで、当初は藁が覆い茂っていたが、後に管理上、撤去されている。また、南庭には巨石による石組みテラスがあり、サンルームが設けられていた。後に建設された大原孫三郎の別邸・有隣荘（1928年）の南面テラスと同じ設計手法であった。室内の装飾については、簡単な建物調査を行っていたので写真記録していたが、アール・デコ様式がふんだんに用いられ、非常に貴重な歴史的建築物であった。



玄関まわり

参考文献：上田恭嗣「アール・デコの建築家薬師寺主計」山陽新聞社2003  
(ノートルダム清心女子大学人間生活学部教授・会員 上田恭嗣)

## 住宅部会通信 2006

## 最近思うこと

広渡孝一郎

(広渡建築設計事務所)



現在 私は住宅部会作品展委員会に所属し、今期の世話人でもあります。日頃は皆さんについていだけで精一杯の状態ですが、いつも会議に出席している仲間の皆様には感謝、感謝で、にご苦労様と頭の下がる思いでいます。会議はいつも同じ顔ぶれが多いようですが、パワー全開ですごく熱気を感じています。

でも最近、何か物足りなさを感じています。このままでは活動そのものを持続させるのが難しいのではと、つまり後に続く人材、特に若い人がいないのです。昨年より年会費が下がり少しは入会しやすくなったようです。でもまだまだJIAのイメージとして、何か事を興すと金がかかる、ある一定の年齢の集まり、何となく暗く、重いというイメージがあり入会したいと思える環境が薄い感があります。

では、どうすれば、ということになるのですが、先日の3月例会、大谷氏と陶器氏のセミナーに参加したとき、いつもと少し雰囲気が違うのを感じました。会場には学生風の若い人がちらほら目に付いたからです。セミナーの参加費は学生、会員の事務所の所員は無料とありました。この日、私の事務所も4人参加させていただきました。小さなことかもしれませんがちょっとしたことで間口が広がり参加しようと思う気持ちを起こさせるものです。いずれにしても20代30代の男女を問わず、若い人のエネルギーがあればと思っています。

ところで最近、理性、倫理性が欠けているような事件、出来事が多くなってきています。昨年の暮れに発生した姉歯問題は衝撃的でわれわれに大きいのしかかり、象徴的な事だったと皆さん思われていることでしょうか、ものづくりの技術は皆持っているのですが心の中が何やら怪しげに変化してきていると感じています。その心の危うさを取り除くひとつの手段として、いろいろな年齢層との交流においてそれぞれの価値観をぶつけることにより、技術的なことも、ものづくりとしての心も切磋琢磨させられるものだと考えます。いろいろなことが起こるたびに国、行政は規制を強めるばかりでますます我々の責任が大きいのしかかるだけで何も解決していないように思います。我々の年代も若い人たちも同じ時代に生きているのですから、ものをつくり、生きるということについて共通の大きな課題としてすこしでも意識することが大切なのかもしれません。

話は変わりますが、昨年9月より住宅部会で、2人展を2006年3月まで、四ツ橋のキッチンハウスで開催させていただきました。私の事務所は12月に、森田進氏と出展し、過去10年間の仕事の整理も出来、ささやかなパンフレットも作成しました。また、このような企画を増やすことができればと思っています。



## 「街が消える橋本市」

中西 重裕

保存再生委員会（スタジオハルビン）



変化に富んだ自然をもつ紀伊半島。険しい山々から流れる豊かな水は、数々の河川を經由して、海に注がれる。大台ヶ原に源流をもつ吉野川は和歌山県に入り、紀ノ川と名を変え西へ向かう。紀ノ川流域の町はかつて大量輸送の中心であった水運による交易でおおいに栄えた。奈良県境にある和歌山県橋本市は、大阪からの交通の便も良く現在ではベッドタウンとして郊外には新興住宅地が多く生まれている。橋本市の中心部に入ると紀ノ川北岸を通る国道24号線沿いから駅前にかけて立派な町家が建ち並んでいる。葛城山系からゆるやかに紀ノ川につながる橋本市は駅前と紀ノ川のすぐ近くを通る国道24号線との間で約9mの高低差がある。その高低差の中を細い路地が縦横に発達し建物が建ち並び街は、和歌山県内でも有数の魅力的な街並みを形成する地域である。住宅や商家、アーケードのある商店街、医院、郵便局などさまざまな建物が並び、

国道に面した重厚な町家の「池永家」は、屋敷地がそのまま紀ノ川に至り、奥の座敷から縁側を通して見える庭の向こうがすぐ紀ノ川である。庭の先端で低く積み上げられた土手が欄干代わりで対岸の風景や紀ノ川のゆったりとした流れを眺めることができる。

橋本市では昭和六十年代に決定した土地区画整理事業によって駅前再開発が進められている。事業の目的に“商業活動の停滞や密集木造住宅の老朽化や防災対策などの理由で安全で快適な中心市街地の形成・・・”とある。ゆっくりしたスピードであったが区画整理が進捗し、以前あった町家が消え空き地になったところも多くなった。また道路の工事がはじまるといよいよその計画の姿が明らかになり空しい気持ちでいっぱいになる。区画整理事業に多額の税金を投下し、再開発の名のもとに各地の個性ある街並みが消え、どこにでもあるような街になった事例が全国に限りなくある。ゆっくりしたスピードであったため今日まで比較的残されてきた街を、消してしまうことの責任が無いのか。

駅前再開発事業が進む中、数年前から地域を考える人々が集まり、地元やさまざまな専門家と勉強会や、見学会、スケッチ展などを開催している。本来住民が自分たちの地域の魅力として、皆で大切に守っていくべき街並みである。曲がりくねった通りをまっすぐに計画するため大きな変化をもたらす土地区画整理事業である。区画整理事業に伴う費用を期待している住民も少なくない。また高齢化や商業の衰退も問題を複雑にしている。

またその地区の中に紀ノ川に注ぐ橋本川の両岸に建てられていた家々もある。川縁に位置する座敷の窓に欄干が設けられ、水面を渡る心地よい涼風を室内に届ける役割をもっていた。もちろん穏やかな日々とは一転する豪雨のときは恐怖の川に変貌する。水害の経験から土間には常に木製の架台が準備され、大雨が予想されると畳を上げ、そこに架台を並べ、畳を置き家財重ね、自ら守り共存する知恵があった。平成8年に発生した豪雨では橋の柱脚に上流からの流出木が留まり、駅前一部の地域が床下浸水の被害を受けた。その結果、河川の幅が狭いと理由で、川幅が拡幅され橋本川両岸にあった魅力的な建物がすべて撤去された。

公共事業と地域の中でさまざまな利害関係があり実に難しい問題である。行政の担当者も街の魅力の大切さに気がついている人がいる。これらの中で、区画整理地区の中のみそや別館（谷口家）、火伏内科、池永家が有形登録文化財に指定された。住民と係わり合いをもちながら魅力の喪失が最小限度に抑えられるような努力を考えなければならない。



国道24号線に面した池永家



池永家を紀ノ川側から見る



みそや別館（谷口家）



商店街にある火伏内科



橋本川に面してあった木村家



増水時に家財を守る架台

## 都市を鑑賞する喜び

- 六甲道駅南の再開発で考えたこと -

井口 勝文

(都市デザイン委員会委員)



僕は音楽に弱い。クラシックを聴くのは好きだが、どのくらい音を聞き分けているのかまるで自信が無い。「同じ曲でも指揮者次第で、、、」と話す人を心から尊敬する。

曲を聴いて心揺さぶられる思いはしたことが無い。だからBGM的に聞いてはいても、音楽を鑑賞しているとはとても言えない。この点では無教養で鈍感な人間だと言われても仕方が無いと自覚している。音楽を聴いて涙を流すほど感動した経験は無いけども、絵や都市を見て涙した事は何度かある。僕はどちらかといえば聴覚人間というよりも視覚人間ではないかと諦めている。

都市を鑑賞する。そのことを教えられた瞬間を今も鮮明に思い出すことが出来る。ニュールンベルグのユースホステルに帰る途中だった。坂道で振り返った時に動けなくなってしまった。自分が何に感動してフリーズしてしまったのか、分かるのにしばらく間があった。目の前に広がる街の風景に全身が感応し、体は震えて茫然自失だった。

これが僕が「都市は美しい!」ということを知った最初の経験だ。初めて海外へ出たヨーロッパで3週間ほど過ぎた頃であった。それまでの僕は、等閑に街を見ていたのだと思う。きれいな街だなアと思って歩いてはいても、それはBGMを楽しむ程度であったと思う。その後それなりに勉強して都市を鑑賞することを知った今の僕ならば、そこまで歩いてきたスカンジナビアや北ドイツの街は南ドイツにあるニュールンベルグ程には美しさの質が及んでいなかったと言うことも出来る。

イスタンブールの楽観的で壮大な、そして神秘的な美しさ。フィレンツェの厳粛で、華やかで、人間の力に満ち満ちた美しさ。ニューヨークの虚構と現実、そしてビルに切り裂かれた空の美しさ。今はいくらでも美しい都市の名前や場所をあげることが出来る。大きな都会ばかりではない。僕の第二の故郷と言って憚らないイタリアはトスカーナの小さな町々を歩いてみると、どれもが見事にその母都市であったフィレンツェの偉大な文化を自分のものになっていることを体感する。都市を鑑賞する喜びは実に大きい。

ロッセアンジェルスらしいほどにいとおいしい人間の営み。砂漠の中に解体してしまった都市の断片を見る美しさ。ここまでくると都市鑑賞も行き過ぎで、オタクの範疇に入るか、空念仏の文明論になってしまいかねない。僕たちは具体的なモノとしての建築、その集合体である都市を作るのが務めだから空念仏で事を収める訳にはいかない。都市空間を作る具体的な方法をしっかりと語りたい。空念仏は別の場所で念じることにしよう。



## 都市点描

僕が言いたいことは単純明快だ。誰が見ても「美しい」と言う都市は在る、ということだ。その美しさは、最も大衆的な目線で支持された美しさでありながら、純粹に哲学的な美を論じる対象にもなりうる美しさだ。

何処の誰が見ても桜は「美しい」と言うように、誰が見ても「美しい」と言う都市は在る。そのことを我々日本人は忘れてしまっていた。いや、もしかしたら日本には「都市が美しい」という文化がもともと無かったのかもしれない。美しさの基準は人それぞれだから一概に決め付けるべきではない、というもっともらしい空念仏が建築家の社会では通用するという噂も聞いたことがある。

都市は前衛芸術家の一作品ではない。都市は前衛も保守も本流も落ちこぼれも、全てを入れて流れる壮大な人間ドラマなのだ。優れた脚本があれば優れたドラマが成立するし、脚本がないと如何に優れた俳優が居てもドラマは成立しない。

では都市の美しさの基準とは何だろう。

戦後に頑張って作り上げた経済大国の都市文明は、美しさに関しては極めて評判が悪い。かといって予定調和的に美しい風景が成立していたという江戸時代に今さら帰れるものでもないだろう。地中海世界に代表されるような都市文明の歴史を持たない我が国では、その基準を皆が共有することは想定外の近代化であったのだ。

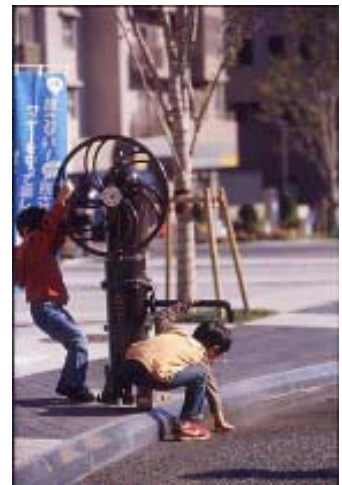
そもそも都市の美しさの基準とは、何も無いところに忽然と作るようなものではない。一般大衆が普通に認識している「街の美しさ」を文章にしたものがその街の美しさの基準とされていることが、ヨーロッパや一部の我が国の都市政策を見れば分かる。美しさの基準は、それを守らせるために作るのではなく、そこに在るコンセンサスが基準になる筈だ。

コンセンサスの無い我が国ではそれを作るプロセスが大切になる。多くの人が集まって自分の街を見回し、そこから美しいものを発見し、新しい美しさを創り加えることを考える。そのプロセスが必要だ。

建築家は自分の仕事を通じてそのようなプロセスに積極的に参加するだけでなく、プロセスを作ることに貢献出来る。そのことによって皆が自分たちの目指すべき都市の美しさの、具体的なイメージを共有することが出来れば、基準はそのようなイメージを文章化しておくだけで良い。

神戸市の六甲道駅南地区震災復興都市再開発事業(区域面積5.9ヘクタール)ではそのようなプロセスを試みた。感動的な美しさを実現したとまでは言わないが、年月を経てそうなる可能性は在ると自負している。関西の建築家たちの真面目な挑戦に関心を持って欲しい。

本再開発事業の詳細は「建築と社会」2006年1月号の特集「都市環境デザインと参加のまちづくり」を御参照ください。(写真撮影：福永一夫)



## 新入会員紹介

京都府	伊熊 昌治	伊熊昌治建築設計事務所
京都府	萬野 光雄	萬野光雄建築設計事務所
兵庫県	庄司 圭介	庄司圭介アトリエ
兵庫県	松尾 和也	松尾設計室
滋賀県	奥 文宏	想武
大阪府	折口 英明	ダイシン建築設計事務所
大阪府	上西 賢	ダイシン建築設計事務所
大阪府	中岡 和巳	都市居住文化研究所
大阪府	横田 泰介	アトリエ テクネ
大阪府	八木 俊樹	安井建築設計事務所
大阪府	庄野 利博	安井建築設計事務所
大阪府	寺岡 宏治	安井建築設計事務所

## 編集後記

長い梅雨のあとは、連日の猛暑。ビールは美味しくいただけますが、体調を維持するのが大変な季節になってきました。

そのせいではありませんが、本号の発行が諸事情により遅れてしまいましたことをここで改めて申し上げます。

ところで、8月5日に、京都会の年中行事となってきた子供たちとのまち歩きを行いました。詳細は近々、京都会のホームページにアップしますので、そちらをご覧くださいと思いますが、上賀茂に残る美しい街並みを歩き、保存再生の大切さと難しさをあらためて感じました。

上賀茂では、その地域の歴史を学び、社家や明神川といった財産を残し、次の世代に伝えていこうということ、自治会や小学校などが一生懸命取り組んでおられます。まちを歩きながら、ふと、我々建築家の役割は何なんだろうと考えてしまいました。

「建築と子供たち」の活動もそうですが、建築家協会の活動の一つ一つが、美しいまちを残し、美しいまちをつくることに繋がっているんだなあと、あらためて思い至った次第です。  
(木戸口浩之)

## 広報委員会

委員長	小南一郎（大阪）
副委員長	小池啓夫（大阪）
委員	足立成美（京都） 一尾晋示（大阪） 井上 守（大阪） 太田恭司（大阪） 木戸口浩之（京都） 瀧川嘉彦（和歌山） 佐々木純一（大阪） 佐藤洋司（大阪） 柴田敬四郎（奈良） 内藤 正（滋賀） 森崎輝行（兵庫） 横関正人（大阪） 大江一夫（住宅部会長）
事務局	穴井宏樹 木田明生 緒方英輔
発行日	2006年4月30日（春号）（遅延：8月7日）
発行人	出江 寛
発行	社団法人 日本建築家協会近畿支部 〒541-0051 大阪府中央区備後町2-5-8 綿業会館 TEL06-6229-3371 FAX06-6229-3374 ホームページ <a href="http://www.jia.or.jp/kinki">http://www.jia.or.jp/kinki</a> メールアドレス <a href="mailto:jia@bc.wakwak.com">jia@bc.wakwak.com</a>

表紙 藤岡郊二郎（撮影：上田恭嗣）